

[B年] 待降節第1主日(2022年11月27日)**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 33章14～16節**

¹⁴見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。¹⁵その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。¹⁶その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう。

【使徒書日課】 ヤコブの手紙 5章1～11節

¹富んでいる人たち、よく聞きなさい。自分にふりかかってくる不幸を思って、泣きわめきなさい。²あなたがたの富は朽ち果て、衣服には虫が付き、³金銀もさびてしまいます。このさびこそが、あなたがたの罪の証拠となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くすでしょう。あなたがたは、この終わりの時のために宝を蓄えたのでした。⁴御覧なさい。畑を刈り入れた労働者にあなたがたが支払わなかった賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人々の叫びは、万軍の主の耳に達しました。⁵あなたがたは、地上でぜいたくに暮らして、快樂にふけり、屠られる日に備え、自分の心を太らせ、⁶正しい人を罪に定めて、殺した。その人は、あなたがたに抵抗していません。

⁷兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。⁸あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。⁹兄弟たち、裁きを受けないようにするためには、互いに不平を言わぬことです。裁く方が戸口に立っておられます。¹⁰兄弟たち、主の名によって語った預言者たちを、辛抱と忍耐の模範としなさい。¹¹忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。

【福音書日課】 ルカによる福音書 21章25～36節

²⁵「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。²⁶人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。²⁷そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。²⁸このようなことが起こり始めたら、身を起して頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」

²⁹それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。³⁰葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。³¹それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。³²はっきり言っておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。³³天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

³⁴「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に畏のようにあなたがたを襲うことになる。³⁵その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。³⁶しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ**エレミヤ書 33章14～16節**

¹⁴その日が来る——主の仰せ。私は、イスラエルの家とユダの家に語った恵みの約束を果たす。¹⁵その日、その時、私はダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をこの地に行く。¹⁶その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに暮らす。この都は、『主は我らの義』と呼ばれる。

ヤコブの手紙 5章1～11節

1さて、富んでいる人たち、自分に降りかかる不幸を思って、泣き叫びなさい。2あなたがたの富は朽ち果て、衣は虫が食い、3金銀もさびてしまいます。このさびが、あなたがたを訴える証拠となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くすでしょう。あなたがたは、この終わりの日々でありながら、宝を蓄えたのです。4見なさい。畑の刈り取りをした労働者にあなたがたが支払わなかった賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人たちの叫びが、万軍の主の耳に届いています。5あなたがたは、地上で贅沢に暮らし、快樂にふけり、屠られる日のために自分の心を肥やしたのです。6あなたがたは正しい人を罪に定めて殺しました。その人は、あなたがたに抵抗していません。

7それゆえ、きょうだいたち、主が来られるときまで〔直訳→主の来臨まで〕忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待ちます。8あなたがたも忍耐しなさい。心を強く保ちなさい。主が来られる時〔直訳→主の来臨〕が近づいているからです。9きょうだいたち、裁かれることがないように、互いに不平を言ってはなりません。見なさい、裁く方が戸口に立っておられます。10きょうだいたち、主の名によって語った預言者たちを、苦難と忍耐の模範としなさい。11私たちは忍耐した人たちを幸いな者とたたえます。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主がもたらした結末を知っています。主は憐れみに満ち、慈しみ深い方です。

ルカによる福音書 21章25～36節

25「そして、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂う中で、諸国の民はおそれおののく。26人々は、これから世界に起こることを予感し、恐怖のあまり気を失うだろう。天の諸力が揺り動かされるからである。27その時、人の子が力と大いなる栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。28このようなことが

起こり始めたら、身を起こし、頭を上げなさい。あなたがたの救いが近づいているからだ。」

29それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。30葉が出始めると、それを見て、夏の近いことが分かる。31それと同じように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと悟りなさい。32よく言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。33天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない。」

34「二日酔いや泥酔や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が罌のように、突如あなたがたを襲うことになる。35その日は、地の面のあらゆる所に住む人々すべてに、襲いかかるからである。36しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・11月27日「待降節第1主日」の日課主題は「主の来臨の希望」。「待降節」は、「降誕日」(12月25日)の前4回の主日を含む期間として定められてきた。この期節には、「主の降誕」を前にして、旧約の預言者や洗礼者ヨハネという先駆者の働きを記念すると共に、降誕物語の中の受胎告知の出来事が記念される。

・「待降節」の典礼色は、一般に「紫」が用いられ、「受難節」同様に「悔い改め」の期節とされてきたが、近年は「青」の典礼色を用い、「待望」の期節としての意味を強調する教会もある。なお、「待降節」中、「待降節第3主日」のみは「喜びの主日」と呼ばれ、典礼色に「バラ色」を用いる習慣が広く受け入れられている。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、将来の「イスラエルとユダ」の回復、エルサレムの復興を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「ヤコブの手紙」から、豊かな者たちに向けて主の来臨に備えるにふさわしい生き方を勧める箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「イエスの小黙示録」と呼ばれる中の一部。

旧約日課(エレミヤ 33 章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典「後の預言者」の第二に収められた預言者エレミヤの預言と活動を伝える書。預言者エレミヤは、「ベニヤミンの地アナトの祭司ヒルキヤの子」(1:1)すなわち地方聖所の祭司であったが、前 7 世紀のユダ王国ヨシヤ王の進めた改革による地方聖所の廃止に伴ってエルサレムの祭司団に加えられ、親バビロニア派の宮廷預言者として王国滅亡まで活動した。その預言は書記官バルク(32 章以降に登場)によって記録され、これが元になって本預言書が編纂、正典編入に至ったと考えられる。ヨシヤ王は、それまでの覇権国アッシリアの勢力後退に伴い、新興勢力のバビロニア・メディア連合に同調し、親バビロニアの立場を取ったが、ヨシヤ王がエジプト軍との戦いで戦死して以降の南王国宮廷は、親エジプト派が主流を形成するようになり、親バビロニア派のエレミヤらは主流派と対立を余儀なくされた。ヨシヤ王はまた、ユダ族およびベニヤミン族によって構成されるユダ王国の枠組みに留まらず、北部諸部族の旧「イスラエル王国」をも取り込んだ「大イスラエル主義」を旗印に支配域を拡大していたので、エレミヤの預言は、「ユダの家」のみならず「イスラエルの家」をも含めた回復を最終目標として見据えたものとなっている。

・「エレミヤ書」は、南王国(ユダの家)がバビロニアに屈服することになるのは、神の南王国民に対する裁きであるとする一方で、その南王国と旧北王国(イスラエルの家)が共に回復されることが神のご計画であるとして、ここに神の「新しい契約」(31:31)を見ている。この「新しい契約」の実現における中心は、ユダのエルサレムであり、ダビデの王家であるという王国神学は、エレミヤにおいても一貫して変わらない。

・16 節「主は我らの救い」は、23:6 にも同様の文脈で現れる「名」で、直訳すると「主は我らの義」(聖書協会共同訳)である。この「主は我らの救い/義」の人の名として、七十人訳ギリシア語旧約聖書は、23:6 で「ヨツァダク」の名を示している。「ヨツァダク」は、レビ族アロンの家系で、南王国滅亡時の大祭司としてバビロンに捕囚連行された人物として伝えられる(代上 5:40)。捕囚解放後、ユダに帰還した人々の指導者として、ダビデ王家の家系であるゼルバベル総督と共に活動したとされるのは、このヨツァダクの子と伝えられる「大祭司ヨシュア」である(ハガイ書など参照)。預言者エレミヤが、この「ヨツァダクの子ヨシュア」を想定していたかどうかはわからないが、少なくとも七十人訳は、そのような歴史的出来事を「預言の成就」と見て、「主は我らの救い」(エレ 23:6)に「ヨツァダク」の名を明示したのだろう。

使徒書日課(ヤコブ 5 章より)

・「ヤコブの手紙」は、「主の兄弟ヤコブ」(ガラ 1:19)が「離散している(ディアスポラの)十二部族」に宛てて記した書簡形式で作成された文書で、「公同書簡」の一つとして分類される。具体的な宛先を想定しない

一般的な教えの書として扱われるが、取り上げられる事柄は非常に具体的で、文書作成当時、各地に広がりを見せていた使徒たちに連なる教会共同体で起こっていた問題に焦点を当てているものと考えられる。差出人の「ヤコブ」を「使徒ヤコブ」ではなく「主の兄弟ヤコブ」と同定する明確な根拠はない。しかし、「使徒ヤコブ」は「使徒言行録」によれば早くに殉教しており(使徒 12 章)、エルサレムの「使徒たちの共同体」の指導的立場を事実上「使徒ヤコブ」から受け継いだと考えられる「主の兄弟ヤコブ」を、消去法でこの書簡の差出人「ヤコブ」と推認することになっている。本書簡は、2 世紀の教会教父の間では引用される例があるが、諸教会で「正典」として認められるたのは、4 世紀の最終的な新約正典確定のころである。

・「主の兄弟ヤコブ」は、エルサレムの教会共同体に最後まで指導者として残り、周囲のユダヤ人から「義人ヤコブ」として知られる人物であったと伝えられる。「義人」と呼ばれたのは、彼が祈りの生活に徹し、衣食は禁欲に徹し、およそ争いを起こさない人物であったからだとされる。そのような人物像からは、本書簡のいさか論争的な言述は意外に思われる。しかし、外部から「義人」と呼ばれるその生き方が、「マタイ福音書」の「山上の説教」で主イエスが示されたような信仰実践に基づくものであるとすれば、「ヤコブ」が主イエスと同じように、他者(ほかのユダヤ人)に対して以上に、自分たち主イエスに従う者の仲間に対してより厳しい「義」を求めたのは、当然であっただろう。「主の兄弟」としてそのような姿勢を求められもしただろう。

・日課箇所は、信者の中の豊かな者たちに、その振る舞いによって無意識のうちに虐げている人々があることを思い起こさせ、悔い改めを促す前半と、「主が来られるときまで忍耐」して信仰者にふさわしい生き方を貫くべきことを勧める後半とに分けられる。

・本書簡は、豊かな者たちに対して厳しい姿勢を示す傾向がある。エルサレムの使徒たちの共同体は、もともとは決して豊かな者たちばかりではなかったと考えられるが、「バルナバ」(使徒 4 章参照)のように裕福な者が多額の喜捨をすることで、貧しい者も含めた共同体生活を維持していたと思われる。一方、ディアスポラ系ユダヤ人から異邦人へと広まった各地の教会共同体は、比較的裕福な者たちによって構成されていたと考えられる。特に、パウロなどはローマ社会にまで食い込んだ「成功したユダヤ人」の家系にあった者であったと考えられ、社会的地位の高い者たちとの交際も盛んであったと推認される。そのような中で、確かに、エルサレムの教会共同体から見て、主イエスの生き方とあまりにかけ離れた「上から目線」の発想で貧しい者や弱者に接する者たちの存在が問題とされたのかもしれない。日課箇所は、特に事業経営者として成功している者に焦点を当てているが、2 章では世間的には分断された社会層から集まる教会共同体の構成員の多様化が、背景として見えてくるのである。

福音書日課(ルカ 21 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中で主イエスの「小黙示録」と呼ばれる教えの最後の部分。「小黙示録」は、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)で共通に伝えられているが、伝え方には差異があり、特に「ルカ福音書」の違いは顕著である。日課箇所中では、34~36 節が、「マタイ」および「マルコ」と「ルカ」とでは大きく異なる。

・「その日」の到来に備えているべき教え(34~36 節)を、「ルカ」は「いつも目を覚まして祈りなさい」という勧めでまとめるが、「マタイ」と「マルコ」は、単に「目を覚ましていなさい」という勧めで語っている。「ルカ」にとって、「目を覚ましている」とは「祈っている」ことである。

来週の誕生日 (11 月 27 日~12 月 3 日)**主日礼拝の讚美歌から**

・21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」は、20 世紀オーストリアの女性教師フェルシュルの作詞。さまざまな曲で歌われてきたが、ドイツのカトリック音楽教師ローレルの旋律でよく知られるようになった。

・21-236 番「見張りの人よ」(= I 218 番「夜を守る友よ」)は、19 世紀イギリスの外交官バウリングの作詞。曲は、アメリカの教会音楽家メーソンがこの詞のために作曲。讚美歌 21 では、I 218「夜を守る友よ」から全面的に改訳されている。

・21-233 番「高く戸を上げよ」は、詩編 24:7 に基づいて 17 世紀プロイセンの牧師ヴァイセルが作詞。18 世紀に敬虔派の讚美歌集で現行の曲がつけられて以降、ドイツを代表する讚美歌として歌われてきた。現行ドイツ讚美歌集 1 番。

・21-235 番「久しく待ちにし」は、18 世紀英国教会史司祭でメソジスト運動の創始者となったジョン・ウェスレーの弟チャールズ・ウェスレーの作詞で、英語圏では最も広く歌われているアドヴェント讚美歌の一つ。この歌詞に組み合わせられた曲は複数あるが、収録曲は、19 世紀英国の教会音楽家ゴントレットの作曲したもの。

21-242 番「主を待ち望むアドヴェント」**Wir sagen euch an den lieben Advent**

- Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die erste Kerze brennt! / Wir sagen euch an eine heilige Zeit, / Machet dem Herrn den Weg bereit!
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
- Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die zweite Kerze brennt! / So nehmet euch eins um das andere an, / Wie euch der Herr an uns getan.
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|
- Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die dritte Kerze brennt! / Nun trag eurer Güte hellen Schein / Weit in die dunkle Welt hinein.
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|

- Wir sagen euch an den lieben Advent. / Sehet die vierte Kerze brennt. / Gott selber wird kommen. Er zögert nicht. / Auf, auf ihr Herzen und werdet licht!
|: Freut euch ihr Christen, / Freuet euch sehr! / Schon ist nahe der Herr.:|

21-236「見張りの人よ」**Watchman, tell us of the night**

- Watchman, tell us of the night, / what its signs of promise are. / Traveler, o'er yon mountain's height, / see that glory-beaming star. / Watchman, does its beauteous ray aught of joy or hope foretell? / Traveler, yes; it brings the day, / promised day of Israel.
- Watchman, tell us of the night; / higher yet that star ascends. / Traveler, blessedness and light, / peace and truth its course portends. / Watchman, will its beams alone / gild the spot that gave them birth? / Traveler, ages are its own; / see, it bursts o'er all the earth.
- Watchman, tell us of the night, / for the morning seems to dawn. / Traveler, darkness takes its flight, / doubt and terror are withdrawn. / Watchman, let thy wanderings cease; / hie thee to thy quiet home. / Traveler, lo! the Prince of Peace, / lo! the Son of God is come!

21-233「高く戸を上げよ」**Macht Hoch die Tür**

- Macht hoch die Tür, die Tor macht weit; / es kommt der Herr der Herrlichkeit, / ein König aller Königreich, / ein Heiland aller Welt zugleich, / der Heil und Leben mit sich bringt; / derhalben jauchzt, mit Freuden singt: / Gelobet sei mein Gott, / mein Schöpfer reich von Rat.
- Er ist gerecht, ein Helfer wert; / Sanftmütigkeit ist sein Gefährt, / sein Königskron ist Heiligkeit, / sein Zeppter ist Barmherzigkeit; / all unsre Not zum End er bringt, / derhalben jauchzt, mit Freuden singt: / Gelobet sei mein Gott, / mein Heiland groß von Tat.
- O wohl dem Land, o wohl der Stadt, / so diesen König bei sich hat. / Wohl allen Herzen insgemein, / da dieser König ziehet ein. / Er ist die rechte Freudensonn, / bringt mit sich lauter Freud und Wonn. / Gelobet sei mein Gott, / mein Tröster früh und spät.
- Macht hoch die Tür, die Tor macht weit, / eu'r Herz zum Tempel zubereit'. / Die Zweiglein der Gottseligkeit / steckt auf mit Andacht, Lust und Freud; / so kommt der König auch zu euch, / ja, Heil und Leben mit zugleich. / Gelobet sei mein Gott, / voll Rat, voll Tat, voll Gnad.
- Komm, o mein Heiland Jesu Christ, / meins Herzens Tür dir offen ist. / Ach zieh mit deiner Gnade ein; / dein Freundlichkeit auch uns erschein. / Dein Heiliger Geist uns führ und leit / den Weg zur ewgen Seligkeit. / Dem Namen dein, o Herr, / sei ewig Preis und Ehr.

21-235「久しく待ちにし」**Come, Thou Long-expected Jesus**

- Come, thou long-expected Jesus, / born to set thy people free; / from our fears and sins release us; / let us find our rest in thee.
- Israel's strength and consolation, / hope of all the earth thou art; / dear desire of every nation, / joy of every longing heart.
- Born thy people to deliver, / born a child and yet a king, / born to reign in us forever, / now thy gracious kingdom bring.
- By thine own eternal Spirit / rule in all our hearts alone; / by thine all-sufficient merit / raise us to thy glorious throne.